

広めるだけの積極的な基盤が日本人の生活の中には存在したのではないかと論ぜられるのである。

Dutthattihaka-sutta と

須陀利経との比較対照について

深 尾 乘 真

Dutthattihaka-sutta (瞋怒八偈経)は現存

パーリー語仏教聖典の Sutta-nipāta の才四章を

Atthaka-sutta としようが、それがならに十六の

ツタに分れているうちの才三のツタに相当するもので

ある。Sutta-nipāta は教蔵中の才五、即ち

Khuddaka-nikāya (小部)の才五に相当し、現在

の学問的研究に於て、仏教の多数の諸聖典のうちでも、

古く成立したものであるが、それらの才四章 (Atthaka-

vagga)と才五章 (Pāṭiyyana)とは最も古く成立

したものであると認められている。

この Atthaka-vagga に相当するものとして、ク

シャーナ王朝治下の西北インドの在俗信者であった支婁
がシナに来て呉の王朝時代 (A. D. 223-253) に訳し
た仏説義足経 (大. 4. 198, vol. 4, pp. 174^b-189^c)
がある。義足経は上下二卷一六経に分類され、その才三
経が須陀利経である。漢訳には散文の因縁譚が存し、パ
ーリー文 Sutta-nipāta にそれは存しないのである。

Dutthattihaka-sutta と須陀利経との韻文を

比較対照すれば、次の如くである。

Vadanti ve dutthamana pi eke,

邪念説彼短

atho pi ve saccamana vadanti,

解意諦説善

Vadan ca jatan nuni no upeti,

□直次及尊

tasma nuni natthi khilo kuhinci.

(Sn. 780)

善惡捨不憂

「和訳」一部の人は実に邪念なる意を語り、また実に
真実の意を語る。牟尼は生じた語に近づかず、それ故に

牟尼は何処にも心の荒むことがない。

有疑正罪法道

Sakam hi dithhim katham accayeyya

以行当耶捨

Yo atumanam sayam eva pava. (Sn. 782)

欲来登且自淨

chandannito ruciyā nivitttho

棄世欲自在

「和訳」自己の戒律と努めを質問されないのに、他の人

人に、自ら自己を言う人があれば、諸善巧者は彼を非聖

sayam samattani pakubbamaṇo

抱至徳不亂

法であると言ふ。

Santo ca bhikkhu abhinibbutatto

以止不拘是世

yatha hi jāneyya, tatha vadēyya.

制欲人所詰

iti han' ti silesu akatthamaṇo,

常自説著戒堅

「和訳」欲にひかれ、ねがいに執著せる人は、いかに自

己見を超えることができるだろうか。自ら完全であると

思ふ(思ふ)なしし、実に知る如くその如く語るのである

是道法点所信

yass ussada n'atthi kuhinci loke.

不著綺行数世

Yo attano selavātani jāntu

如有守戒行人

(Sn. 783)

「和訳」寂靜となり、完全に安静な比丘は諸戒に於て

ananuputtho ca paresa pava

問不及先具演

「私はかくの如し」と誇ることなく、世の中のどこにて

も(煩惱)増盛がない為に、諸善巧者は政を聖法である

anariyadhammam kusala tam ahu,

と言ふ。

Pakappita samkhata yassa dhamma

法不匿不朽言

purakkhata santi avivadata,

毀尊我不喜惡

yad attani passati anisamsam,

自見行無邪漏

tam nissito kuppapaticcasantim.

(Sn. 784) 不著想何瞋喜

「和訳」汚れた諸法があり、(それを)あらかじめ設け、つくりなし、偏重して、自我に対して価値を見る人は、
おぼろげの疑る寧靜に依存する。

Ditthinivesa na hi svativatta

所我有以転捨

dhammesu niccheyya samuggahitam,

魚明法正著持

tasma naro tesu nivesanesu

求正利得必空

nirassati adiyati-cca dhammam.(Sn.785)

以想空法本空

「和訳」諸法に関して執取を確知して見住居から超越することは実に容易でない。それ故に人はそれらの住居に於いて法を斥けまた取る。

Dhonassa hi natthi kuhinci loke

不著余無所有

pakappita ditthi bhavabhavesu,

行不願三界生

mayan ca manan ca pahaya dhono

可瞋冥悉已断

sa kena gaccheya : anupayo so.

(Sn. 786)

云何行有処行

「和訳」智者(除遣者)には実に世の中のどこにても諸の存在に対してあらかじめ設けた見がない。智者(除遣者)は虚偽と驕慢とを捨断して、たより近づかない彼は、何故に(輪廻に)おもむくであろうか。

所当有悉裂去

anupayam kena katham vadeyya,

所道説無愛著

attham nirattam na hi tassa atthi:

已不著亦可離

adosi so ditthi-m-idheva sabba ti.

(Sn. 787)

從行拔悉捨去

「和訳」たより近づくものは実に諸法に於て言説に近く、たより近づくかない者は何故に何の如く言うだろうか。何となれば彼には我も非我をもあるなし、彼はここに一切の見を払い除いた。

パーリ語聖典、或いは漢訳聖典のみによつて仏教思想の原意を十分理解することは困難であると思われる。故にパーリ語漢訳両聖典或いはサンスクリット語聖典、チベット訳聖典等を比較研究して、その一致点を眺めればその原意が明確になり得ると思うのである。

竜樹に於ける二諦説

— 嘉祥の理解を中心として —

真野成英

三論宗に於ける二諦説は三論教学全体の組織を形成する教理として全面的に受容せられたのである。そして嘉祥の二諦説の発展の特色は八不中道である。この八不中道によつて嘉祥の二諦説を眺めると世諦中道、真諦中道、二諦合明中道であり「八不具三種中道。即是二諦也。」と主張した処に彼の特異がみられる。

中論の二諦説は世俗の縁生法なるものを空なる勝義の真実の仮法と認め、この縁生法である仮法によつて空なる勝義の真実を自覚させる立場であり、縁生法の真実である姿なき空へ帰ろうとする仮から空へ向かう徹底的な否定の立場であつたが嘉祥は世俗の仮法を直ちに空の真実として、積極的に肯定していつた。即ち嘉祥は世俗諦と真諦とを「空仮相即」の立買から並列的に並べて、しかもそれを肯定的に見ていつたのである。竜樹の徹底し